

市制10周年記念

第11回 出土文化財展



開発予定地内に遺跡はありませんか？ 工事計画の前に確認してください。

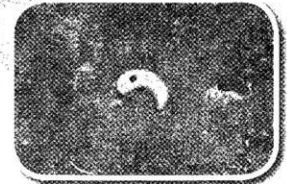
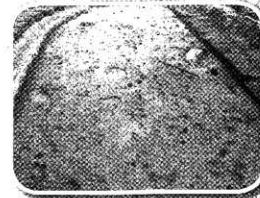
掛川市内には現在704遺跡が知られており、県内でいちばん遺跡の多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの“心のふるさと”であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、『文化財保護法』により、遺跡のある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などをする場合には、事前に文化庁に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をせずに工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった——ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会社会教育課にご相談ください。

なお、教育委員会・図書館には、市内にある遺跡の範囲を示した『遺跡地図』がありますので、工事を計画する前に必ず確認してください。

掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係
電話(0537)21-1158



日時 平成27年6月17日(水)～6月21日(日)
午前9時から午後5時まで
※17日(水)・18日(木)は午後7時まで

場所 掛川市中央図書館 1階 生涯学習ホール

掛川市教育委員会 社会教育課

吉岡下ノ段遺跡(第11次)

1. 調査地 掛川市吉岡
2. 調査原因 茶園の改植
3. 調査面積 1,040 m²
4. 調査期間 平成26年7月～平成26年11月

吉岡下ノ段遺跡は、原野谷川により形成された吉岡原と呼ばれる台地(河岸段丘)に立地する縄文時代中期から平安時代にかけての遺跡です。

吉岡や高田の台地上には、弥生時代後期(約1,800年前)から古墳時代前期(約1,700年前)の集落跡が点在していることがわかっています。また、遺跡の東端には春林院古墳(約1,600年前)、北西には吉岡大塚古墳(約1,550年前)が所在しています。どちらも和田岡古墳群に含まれる大型古墳で、古墳時代にこの地域を支配していた首長の墓と考えられています。

第11次発掘調査地点は台地の縁辺に位置し、南側は約20mの落差があり、見晴らしのよい場所に当たります。当時はこのような場所を

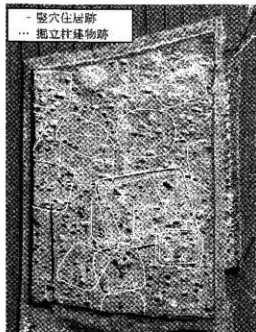


調査地点遠景



作業風景

選んで住んでいたようで、吉岡原の縁辺部では多くの住居跡等が見つっています。



北側調査区完掘の様子



竪穴住居跡①

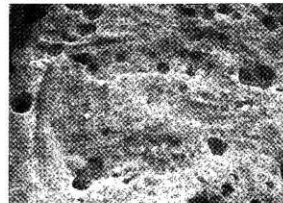
今回の発掘調査は、茶園の改植により壊れてしまう遺跡を記録保存するために行いました。調査区は南北に分け、北側から調査を実施しました。

北側の調査区では、弥生時代後期(約1,800年前)から古墳時代中期(約1,600年前)にかけての竪穴住居跡などが重なり合っており、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡2棟、平地住居跡1軒が確認されました。

南側の調査区は、元々今よりも小高い地形であったと考えられ、開墾により遺構も含めて大きく削られていました。出土した遺物の数は少なかったですが、小穴や布掘り掘立柱建物跡1棟が見つかりました。

竪穴住居跡は地面を掘り下げて床面を作る住居です。調査で見つかった竪穴住居跡の多くは、平面の形が角の丸い四角形でした。耕作で削られたため、竪穴部分は浅くなっていますが、床や煮炊きするための炉が残っている住居跡もありました。

掘立柱建物跡は地面に穴を掘って柱を立てた建物で、高床の倉庫として使われたと考えられています。



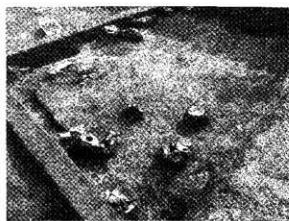
竪穴住居跡②



平地住居跡の調査

平地住居跡は、地面を掘り下げずに床面とした住居跡です。調査で見つかった住居跡には、一边が約10mの四角形に溝が巡っていました。

布掘り掘立柱建物跡は柱穴が溝でつながっている建物跡です。溝は柱同士の間を横木を通した部分で、柱をつなげることで、倒れにくい建物を建てようとしたと考えられます。同じような建物跡は、



土器出土の塚子①



布掘り掘立柱建物

溝ノ口遺跡、今坂遺跡、高田遺跡などで見つかったとおり、市内で4番目の発見となりました。

今回の調査では、600点を超えるたくさんの遺物が出土しました。破片で見つかったものがほとんどで、古墳時代前期(約1,700年前)の上師器を中心に、縄文時代中期(約5,000年前)から古墳時代中期(約1,600年前)の土器が出土しました。

土器の多くは、甕、壺、高坏といった生活に使われたものですが、祭祀に使われたと考えられる古墳時代前期の小型の土器や、古墳時代中期の滑石製勾玉も出土しました。



土器出土の様子②



小型土器出土の様子



勾玉出土の様子

今回の調査では縄文時代の建物跡は見つかりませんが、縄文時代中期や晩期(約2,500年前)の土器が見つかりました。また、石器に使われた黒曜石の破片も見つかりました。これらの遺物から、縄文時代から人々が生活していたことがわかりました。

これまで吉岡下ノ段遺跡や周辺の遺跡で行われた発掘調査では、和田岡古墳群が造られた古墳時代中期の遺構や遺物の発見は少なく、古墳を造った人々の様子はよく分かっていません。

今回、その時期の土器や祭祀に使われた勾玉が見つかり、当時、和田岡原の台地上で活動していた人々の様子を明らかにするための新しい資料が加わりました。



発掘体験の様子

古墳時代の住居跡から桃の種が出土

吉岡下ノ段遺跡(第12次)

1. 調査地 掛川市吉岡
2. 調査原因 茶園の改種
3. 調査面積 830 m²
4. 調査期間 平成26年10月～平成27年2月

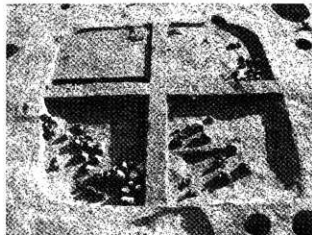
第12次発掘調査では、古墳時代前期(約1,700年前)の堅穴住居跡4軒、掘立建物跡1棟と多数の小穴を確認しました。

堅穴住居跡4軒のうち、2軒はその全体を確認できましたが、1軒は、南側の調査区外へ続き、もう1軒は貼床と焼上だけを検出し、掘り方を確認できませんでした。

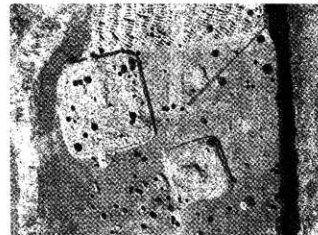
全体が確認できた2軒の堅穴住居跡は、平面の形が、ほぼ正方形でした。大きさは、1軒が4m四方、もう1軒が6m四方でした。4m四方の堅穴住居跡の中からは、住居の建築部材が燃えて炭になった炭化材が多く出土したことから、この家は火災にあったことがわかりました。炭化材とともに壊れた土器と石が多く出土しており、火災にあった後に、廃棄されたと考えられます。過去に他の遺跡で、弥生時代後期の火災にあった堅穴住居跡が調査されています。出土した炭化材を調べてみると、針葉樹のマキ、広葉樹のクリ、サカキなど堅い木材を使用していることがわかりました。今後、今回の調査で見つかった堅穴住居跡には、どのような木材を使用していたか調査していきます。



調査区南側の様子



火災にあった堅穴住居跡



2軒の堅穴住居跡

ここからは、平成26年度に整理調査を実施した遺跡を紹介します。



煮炊きをした炉の跡



大きな竪穴住居跡

6m四方の竪穴住居跡には、煮炊きをした炉の跡があり、中央からやや北に寄った場所に位置していました。炉は、土が真っ赤に焼けて固くしまり、炉の端には焼けた石が置かれていました。また、家の中心の2m四方には固くたたき締められた貼床がありました。この家の中からも多くの土器が出土しています。そして、土器と一緒に桃の種が2個発見されました。桃は魔よけの力があるという言い伝えもあり、祭祀に使用されたのかもしれない。

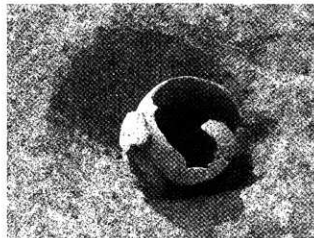
掘立柱建物跡の柱間は、1間×2間の大きさでした。竪穴住居跡で生活していた人々が、米などの食料を保管していたのでしょう。

また、小穴からは壺や甕が出土しました。

今回の調査地点は、古墳時代前期のムラの一部分であり、約50年の間、この場所で人々が生活していたことがわかりました。



掘立柱建物跡：人が立っている所が柱の跡



小穴から土器が出土した様子

和田岡古墳群 よしおのおつかこふん 和田岡古墳群 吉岡大塚古墳 (第6次)

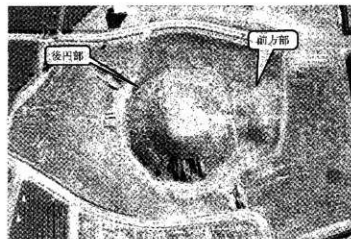
和田岡古墳群は、和田岡地区に点在する5世紀前後に造られた古墳群です。平成8年に4基の前方後円墳と1基の円墳が国の史跡とされました。その中の一つである吉岡大塚古墳は、古墳時代中期(約1,550年前)に造られた全長55mの前方後円墳です。

平成19年度から史跡整備に向け、古墳の詳細な資料を得るため、発掘調査を行ってきました。

これまでの調査で、後円部は二段に築かれ、上段と下段の間には1.2~1.4m幅でテラスと呼ばれる平らな部分が巡っていることがわかりました。そして、後円部と前方部の斜面には、埴石が葺かれていました。

また、後円部の墳頂部とテラス、前方部の墳頂部には、円筒埴輪、朝顔形埴輪が並べられていたことが、わかりました。

このような調査結果に基づき、今後吉岡大塚古墳の整備を進めていきます。

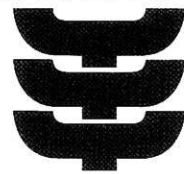


上空から見た吉岡大塚古墳



確認された埴石

明和9年(1772)5月21日(陰暦)、現在の長谷小出ヶ谷地区において銅鐃一具が発見され、掛川藩に届け出されました。掛川市教育委員会では、この日を記念して、市民の埋蔵文化財に対する理解と保護・保存しようとする意識の向上を願い、出土文化財展を開催しています。



文化財愛護シンボルマーク